

# 地球がまわる音を聴く： パンデミック以降のウェルビーイング

2022年6月29日(水)ー11月6日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

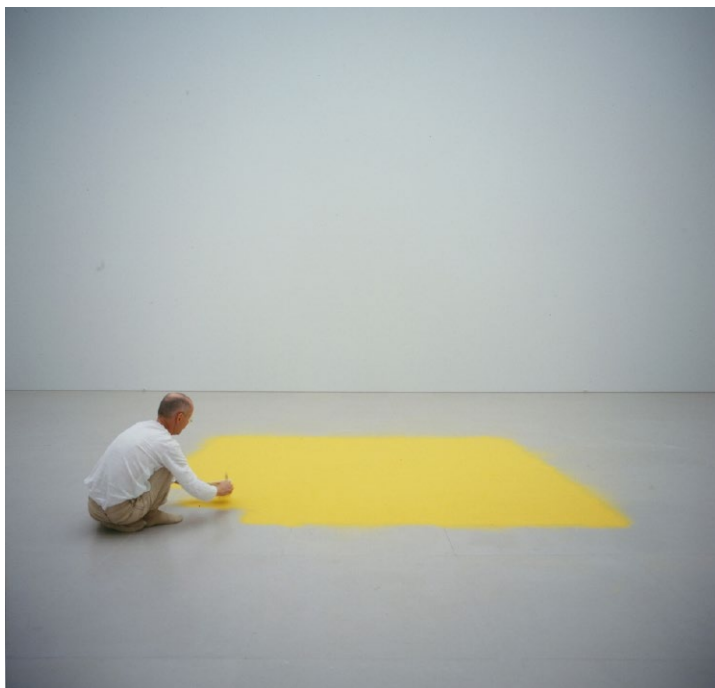
森美術館は、2022年6月29日(水)から11月6日(日)まで、「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」を開催します。

2020年以降、目に見えないウイルスによって日常が奪われ、私たちの生活や心境は大きく変化しました。こうした状況下、現代アートを含むさまざまな芸術表現が、かつてない切実さで心に響きます。本展では、パンデミック以降の新しい時代をいかに生きるのか、心身ともに健康である「ウェルビーイング」とは何か、を現代アートに込められた多様な視点を通して考えます。自然と人間、個人と社会、家族、繰り返される日常、精神世界、生と死など、生や実存に結びつく主題の作品が「よく生きる」ことへの考察を促します。

また、本展では、美術館ならではのリアルな空間での体験を重視し、インスタレーション、彫刻、映像、写真、絵画など、国内外のアーティスト16名の作品を紹介します。五感を研ぎ澄ませ、作品の素材やスケールを体感しながらアートと向き合うことは、他者や社会から与えられるのではない、自分自身にとってのウェルビーイング、すなわち「よく生きる」ことについて考えるきっかけになることでしょう。

本展のタイトル「地球がまわる音を聴く」は、オノ・ヨーコのインストラクション・アート<sup>※1</sup>から引用しています。意識を壮大な宇宙へと誘い、私たちがその営みの一部に過ぎないことを想像させ、新たな思索へと導いてくれるものです。パンデミック以降の世界において、人間の生を本質的に問い直そうとするとき、こうした想像力こそが私たちに未来の可能性を示してくれるのではないのでしょうか。

※1 コンセプチュアル・アートの形式のひとつで、作家からのインストラクション(指示)そのもの、あるいはその記述自体を作品としたもの。



《ヘーゼルナッツの花粉》を展示するヴォルフガング・ライプ、  
豊田市美術館(愛知)2003年  
Courtesy: ケンジタキギャラリー(名古屋、東京)  
撮影: 怡土鉄夫  
※参考図版

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 出展アーティスト \* 姓のアルファベット順

エレン・アルトフェスト	1970年ニューヨーク生まれ、同地およびコネチカット州ケント在住
青野文昭	1968年宮城県生まれ、同地在住
モンティエン・ブンマー	1953年バンコク生まれ、2000年同地にて没
ロベール・クートラス	1930年パリ生まれ、1985年同地にて没
堀尾昭子	1937年徳島県生まれ、兵庫県在住
堀尾貞治	1939年兵庫県生まれ、2018年同地にて没
飯山由貴	1988年神奈川県生まれ、東京都在住
金崎将司	1990年東京都生まれ、同地在住
金沢寿美	1979年兵庫県生まれ、東京都在住
小泉明郎	1976年群馬県生まれ、神奈川県在住
ヴォルフガング・ライブ	1950年ドイツ、メッツィンゲン生まれ、ドイツ南部、南インドおよびニューヨーク在住
ゾーイ・レナード	1961年ニューヨーク生まれ、同地在住
内藤正敏	1938年東京都生まれ、同地在住
オノ・ヨーコ	1933年東京都生まれ、ニューヨーク在住
ツァイ・チャウエイ(蔡佳葳)	1980年台北生まれ、同地在住
ギド・ファン・デア・ウェルヴェ	1977年オランダ、パーペンドレヒト生まれ、ベルリン、アムステルダムおよびフィンランド、ハッシン在住

## 開催概要

**展覧会名:**「地球がまわる音を聴く:パンデミック以降のウェルビーイング」

**主催:** 森美術館

**企画:** 片岡真実(森美術館館長)

熊倉晴子(森美術館アシスタント・キュレーター)

徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)

**会期:** 2022年6月29日(水)-11月6日(日)

**会場:** 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

**開館時間:** 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで)

\* 入館は閉館時間の30分前まで \* 会期中無休

\* 当館の新型コロナウイルスの感染症対策への取り組みについては  
ウェブサイトでご確認ください。

<https://art-view.roppongihills.com/jp/info/countermeasures/index.html>

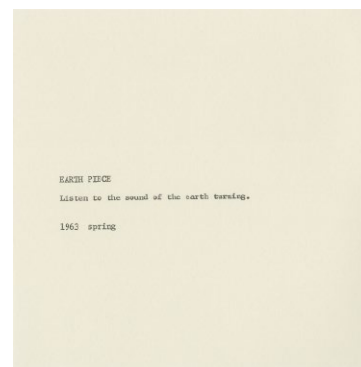
**入館料:** 未定

**同時開催:**「MAM コレクション015:仙境へようこそーやなぎみわ、小谷元彦、ユ・スンホ、名和晃平」

「MAM スクリーン016:ツァオ・フェイ(曹斐)」

「MAM リサーチ009:正義をもとめてーアジア系アメリカ人の芸術運動」

**一般のお問い合わせ:** Tel: 050-5541-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト [www.mori.art.museum](http://www.mori.art.museum)



オノ・ヨーコ 《アース・ピース》  
1963年春 オフセット・プリント  
オノ・ヨーコ『Grapefruit』(Wunernaum Press、  
東京、1964年)より

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/35bUcPv>

**プレスリリース** お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: [mam-pr@kyodo-pr.co.jp](mailto:mam-pr@kyodo-pr.co.jp)

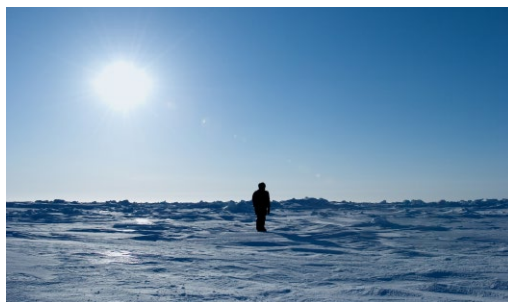
## 本展が問いかけるもの & 出展作品について

### ■ パンデミック以降をいかに生きるか？

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、世界中の活動が急に停止した時、人間には何ができたのでしょうか？アートには何ができたのでしょうか？パンデミック以降をいかに生きるべきなのでしょう

オノ・ヨーコのインストラクション(指示書)を集めた「グレープフルーツ」には、本展のタイトルにもなっている「地球がまわる音を聴く」など、想像するだけで世界が広がる言葉があふれています。また、**ギド・ファン・デア・ウェルヴェ**が行った自宅の回りを何千周も走り続け100キロを走破するというパフォーマンスは、日々の行為の積み重ね自体が壮大な営為になり得ることを表しています。**ヴォルフガング・ライプ**は、花粉や蜜蝋、牛乳などの身近なものを用いて、生命のエッセンスを最もシンプルかつ美しく提示してきました。**エレン・アルトフェスト**の森の中で描き続けた木の絵は、自然やそこに含まれる幾多の生命の本質を明示します。

「パンデミック以降をいかに生きるか？」を考えるために、これらの作品の想像力を借りて、この複雑で広大な世界を省みること、本質を見つめ直すことから始めてみるのはいかがでしょうか。



ギド・ファン・デア・ウェルヴェ  
《第9番 世界と一緒に回らなかった日》  
2007年 ハイビジョン・ビデオ・インスタレーション 8分40秒  
Courtesy: Monitor, Rome; Grimm, Amsterdam; Luhring Augustine, New York  
撮影:ベン・ゲラーツ

### ■ 私たちの心はどのように社会を捉え、どのような風景を描いたのか？

パンデミックは、世界中に健康危機をもたらしただけでなく、私たちの生きる社会に横たわるさまざまな問題、分断や衝突を可視化し、国や人種、宗教といった大きな枠組みから、地域や家庭といったより身近な環境、生き方をも直視させました。そうした状況のなかで私たちの心は、どのような風景を描いていたのでしょうか？

家庭内での暴力をテーマにした**飯山由貴**の新作は、被害者と加害者の双方からのインタビューを中心としたインスタレーション作品で、鑑賞する私たちひとりひとりに、自分自身の日常を異なる視点から見つめることを促します。**小泉明郎**の新作映像は、催眠術を用いて言語に頼った人間の認識の脆弱性を明らかにしながらも、心の回復の可能性を提示するものです。また、1990年代にエイズで亡くなった友人に捧げられた**ゾーイ・レナード**のインスタレーションも、日常的な行為が救済につながる可能性や、連帯するコミュニティの力強さを示します。

さまざまな状況下で社会や自分自身と向き合うアーティストたちの作品は、私たちの生活や身の回りの環境を、異なる視点から観察し、再考することの重要性を示しています。



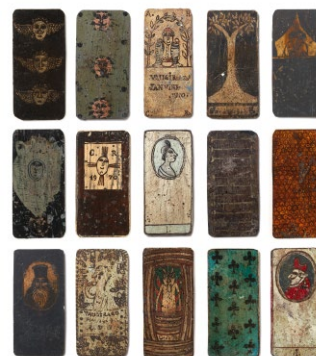
飯山由貴 《海の観音さまに会いに行く》  
2014年 ビデオ、スライド  
撮影:宮澤 響 ※参考図版

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## ■ 生きることそのものが芸術になるのか？

他者からの評価のためではなく、自分のために、湧きあがる衝動のまま絵を描く、彫刻を作る、さまざまな表現に取り組むアーティストたちがいます。**堀尾貞治**は、表現することは生きる上でまるで空気のように存在する「あたりまえのこと」であるとし、さまざまなメディアを用いて全身全霊で作品制作に取り組みました。その数は10万点を超えます。妻である**堀尾昭子**も同じ場所で生活し、全く性格の異なる作品を制作し続け、二人の生活はそのまま芸術表現に繋がっていました。**ロベール・クートラス**は、画壇をはなれ、困窮の中で自身が信じる作品世界を追求し続けました。**金崎将司**は高度な集中力を持続し、雑誌や広告の断片を重ね、抽象的な立体を制作し続けます。

あらゆるものの定義や前提が揺るがされた今、「生きることとはなにか」という問いに、もう一度、向き合う必要があるのではないのでしょうか。表現する衝動やエネルギーが作品からあふれ出し、生きることの根源的な意味と直結するこれらの作品は、まさにひとつの回答を提示しているといえるでしょう。



ロベール・クートラス  
《僕の夜のコンポジション(リザーブカルト)》  
1970年  
油彩、ボール紙 約12×6cm(各)  
撮影：内田芳孝+岡野圭、片村文人

## ■ 自分と宇宙、今日の一瞬と永遠はどう繋がっているのか？

有史以来、人類は自然災害や争い、そして病など、さまざまな困難に絶えず直面してきました。日々を生きることが脅かされるとき、私たちはどのようにそれを乗り越えてきたのでしょうか。過去や自然から学び、壮大な時間と空間の流れのなかに自分自身を位置づけてみることは、そのひとつの方法かもしれません。

東北をテーマとした**内藤正敏**の写真作品と**青野文昭**のインスタレーションはどちらも、遙か過去と現在を繋ぎ、自然や宇宙、神々や霊的な存在への畏怖の念とともに歩んだ人類の歴史を感じさせます。また、新聞という日常的な素材を用いた**金沢寿美**の作品は、紙面に掲載される大小さまざまな出来事の連なりが、やがては宇宙をも思わせる大きな時間の流れとなることを、大型のインスタレーションで表現しています。展覧会の最後を飾る**モンティエ・ブンマー**のインスタレーション作品は、鑑賞する人に呼吸を整え瞑想する空間を与え、**ツイ・チャウエイ(蔡佳葳)**の作品は、鏡に映り込むわたしたち自身の存在もまた、曼荼羅の表す壮大な宇宙の一部であることを示しているようです。



〈左〉ツイ・チャウエイ(蔡佳葳)  
《子宮とダイヤモンド》  
2021年 手吹きガラス、鏡、ダイヤモンド 300×600cm  
展示風景：「ツイ・チャウエイ：子宮とダイヤモンド」リブ・フォーエバー財団(台中)  
2021年

〈右〉金沢寿美  
展示風景：「第6回新鋭作家展 影=光」川口市立アートギャラリー・アトリア(埼玉)2017年  
撮影：阿部晴夢



### プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp